

自閉症スペクトラムの小学4年生の児童に対して、学習量の調整と特性に対する配慮によって学習への意欲を高めた事例

1. 事例の概要

本件は、A小学校の自閉症・情緒障害特別支援学級に在籍する4年生の自閉症スペクトラムのあるB児について、学習量の調整と特性に対する配慮を行った事例である。

B児は、注意集中の時間が短く、できないと思うと意欲が低下する。一度に多くのことを処理することが苦手で、話の一部だけを聞いて反応し、適切な行動がとりにくい。また、書くことや、物を片付けることも苦手である。

B児への支援に当たっては、関係機関と連携をとり、保護者と合意形成を図りながら、個別の教育支援計画と個別の指導計画を作成した。さらに、交流学級の担任とB児の特性について共通理解を図り、合理的配慮を検討した。具体的には、教科学習においては、一時間の学習の流れを明示して見通しをもたせたり、ノートに書く量を調節したりした。また、授業の途中経過を確認し、学習に集中できない時は深呼吸をするなどして気分転換を図ったり、B児を理解してくれる児童と同じグループにしたりするなどの配慮を行った。これらの結果、以前と比較して意欲的に学習を継続できるようになってきた。

キーワード 自閉症スペクトラム、注意集中、ソーシャルスキルトレーニング、ワーキングメモリー、聴覚過敏

2. 児童の実態

B児は、小学校3年生まで通常の学級に在籍していたが、4年生からA小学校に転入し、現在は自閉症・情緒障害特別支援学級に在籍している。一斉指導では立ち歩くことが多く、授業に集中できなかった。周囲の児童とトラブルを起こし、登校するのをしぶるようになった。また、宿題を忘れることが多く、持ち物を管理することが苦手で、片付けができないといった実態がある。

よく会話はするが、時折、質問の意図とは違う返答をする等、言語の理解に難しさがみられる。話の一部分だけを聞いて反応し、交流学級でもトラブルになることがあった。衝動性が高く、休み時間には、ルールから外れた行動をすることがあった。また、検査の結果から視覚支援が有効なことやワーキングメモリーに課題があることが分かった。集中して学習できる時間が短く、ノートに書く字は乱雑であった。聴覚過敏も見られる。

3. 本事例に関する基礎的環境整備

- A小学校では、特別支援教育コーディネーターが3名指名され、校長のリーダーシップの下に全教職員が特別支援教育を推進している。【基礎2】
- A小学校のあるC市インクルーシブ教育推進研究会で作成した「合理的配慮事例集」を使用して合理的配慮の実際について学習し、取り組んでいる。【基礎2】
- 理科や社会科では、デジタル教材やデジタル教科書、教員自作のパワーポイント教材を使用している。また、個別学習にタブレット型端末を使用している。【基礎4】
- コミュニケーション力を高めるための表情カード、ソーシャルスキルトレーニング(以下、「SST」という。)用のカード類を活用している。【基礎4】
- B児が雑音等の刺激が気になって学習に集中できない時は、隣接の小教室を個別学習の場として利用している。【基礎5】

- 自閉症・情緒障害特別支援学級の担任と交流学級の担任が、交流及び共同学習の目的や内容について「交流及び共同学習打合せ記録」や週案に基づいて打合せを行っている。
【基礎8】

4. 合意形成のプロセス

保護者は子育てに悩んでおり、B児が小学校3年生時に、登校をしづらくなるようになってきたため、就学相談を受けることにした。

C市での就学相談の結果、自閉症・情緒障害特別支援学級への入級を勧められた保護者は、B児が落ち着いて学習でき、登校できるようになるのであれば特別支援学級に在籍することがよいと判断し、4年生時からA小学校の自閉症・情緒障害特別支援学級に在籍することにした。転入直前の3月に、保護者とA小学校の自閉症・情緒障害特別支援学級担任、通級指導担当者の3人で、B児の様子や保護者のニーズについて話し合った。保護者の願いは、「とにかく学校に喜んで通ってほしい。落ち着いて学習できるようになってほしい。」というものだった。これらを踏まえて、B児の個別の教育支援計画や個別の指導計画を作成し、支援を行った。

5. 合理的配慮の実践

- 学習内容を10～15分ずつ3つから4つに分け、提示した。【合理①-1-1】
- 耳障りな音が生じるような場面では、イヤーマフをつける。【合理①-1-1】
- 教育番組のデジタルコンテンツや絵カードを利用してSSTを行う。【合理①-1-1】
- 漢字練習において1回の学ぶ量を3文字程度、一文字の練習回数も3回程度にしたり、板書のまとめの部分だけをノートに記入するよう促したりするなどの学習内容や量の調整を行う。【合理①-1-2】
- プリントの文章問題は、教員に問題文を読み上げてもらい、問題を解くようにする。
【合理①-1-2】
- 「①前時のふりかえりの確認、②課題の把握、③自力解決、④ペアまたはグループで自分の考えを出し合い比較する、⑤全体での話し合い集団解決、⑥まとめ、⑦適用問題を解く、⑧ふりかえり」の流れで授業を展開している。【合理①-2-2】
- 収納箱を設置し、使用した教材はそこに入れることにした。【合理③-2】

6. 本事例の成果と課題

B児の特性を把握して、作成した個別の指導計画に基づき指導した結果、特別支援学級を自分の居場所ととらえ、行動が落ち着き始めた。また、低学年児童に対する思いやりのある行動も見られるようになってきた。特に、担任が、個に応じた指導を工夫することで、意欲的に学習に取り組むようになり、達成感を持てる場面が増えてきた。保護者は、「B児が登校をしづらなくなり、学校に休まずに通うようになった。宿題に取り組むようになった。」と成長を喜び、B児に対する支援の必要性を理解するようになったことで学校の指導にも協力的となった。

課題としては、特別支援学級の中で、B児に特化した個別指導の時間を確保することが難しいことが挙げられる。